

千葉北部地区新市街地造成整備事業 関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

—印西市白井谷奥遺跡—



平成11年3月

千葉県企業庁
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第369集として、千葉県企業庁の千葉北部地区新市街地造成整備事業関連に伴って実施した印西市白井谷奥遺跡の確認調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良・平安時代の竪穴住居や掘立柱建物などが確認され、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また文化財の保護、普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘調査から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成11年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村 好成

凡 例

- 1 本書は、千葉県企業庁による千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査の確認調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県印西市戸神北ノ内1043に所在する白井谷奥遺跡（遺跡コードCN508）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県企業庁の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、北部調査事務所長 折原繁の指導のもと、主任技師 石田清彦が、下記の期間に実施した
発掘調査 平成11年2月1日～平成11年2月8日・整理作業 平成11年2月9日～平成11年2月28日
- 5 本書の執筆は、主任技師 石田清彦が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県企業庁ニュータウン整備部、印西市教育委員会の御指導、御助言を得た。
- 7 本書に使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 印西市発行 1/25,000 印西市全図
第2図 印西市発行 1/2,500 都市計画図
- 8 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による平成10年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 10 本書で呼称した遺構番号は、編集の都合上、調査時の番号と異なる。

本文目次

| | | | |
|-----------------|---|-------------------|---|
| I はじめに…………… | 1 | II 検出した遺構と遺物…………… | 4 |
| 1 調査の概要…………… | 1 | 1 調査成果の概要…………… | 4 |
| 2 遺跡の位置と環境…………… | 1 | 2 遺構と遺物…………… | 4 |
| | | III まとめ…………… | 6 |

挿図目次

| | | | |
|--------------------------|---|-----------------------|---|
| 第1図 周辺の主な奈良・平安時代の遺跡…………… | 2 | 第6図 1号溝、2号溝、3号溝、 | |
| 第2図 調査区と周辺の地形…………… | 3 | 1号掘立柱建物跡、1号陥穴…………… | 8 |
| 第3図 遺構全体図と地形図…………… | 7 | 第7図 1号竪穴住居跡と出土遺物…………… | 9 |
| 第4図 2T～8T遺構配置図…………… | 7 | 第8図 2T・7T出土遺物…………… | 9 |
| 第5図 8T断面図…………… | 7 | | |

図版目次

| | |
|---|--|
| 図版1 遺跡周辺航空写真 | |
| 図版2 調査前近景 調査の様子 2T全景 3T全景 4T全景 5T全景 7T埋没谷 5T埋没谷 | |
| 図版3 1号溝 1号掘立柱建物跡 1号竪穴住居跡 | |
| 図版4 出土遺物 | |

I はじめに

1 調査の概要

(1) 調査の経過

千葉県企業庁は、千葉北部地区新市街地造成整備事業の一環として農地造成を計画し、事業地内における埋蔵文化財の所在の有無について千葉県教育委員会に照会した。これを受けて現地を踏査した結果、本事業地は周知の「白井谷奥遺跡」に含まれることが判明した。本事業地は千葉県企業庁による営農調整区域内で、盛土工事を行い農地を造成する部分であるため、調査区内の遺構は盛土によって保護されるが、工事の施工前に確認調査を行い、遺構の分布を記録することで協議が調った。また、下層については工事による影響が軽微であると判断されるため、今回の発掘調査の対象としないこととなった。調査は(株)千葉県文化財センターが千葉県企業庁より業務委託を受け、平成11年2月に実施した。調査完了に伴い平成11年2月～3月に整理作業を行った。

(2) 調査の方法

公共座標（第IX座標系）に従い、調査範囲にグリッドの設定を行った。グリッドは白井谷奥遺跡のほかには鳴神山遺跡を包含する広範囲に対して共通のグリッドとなるようにした。方眼の設定に当たっては座標 $X = -22,840$ 、 $Y = 25,360$ を起点として、両軸をそれぞれ40m間隔で区切り大グリッドとした。さらにグリッドの中を $4\text{m} \times 4\text{m}$ の100個の小グリッドに分割した。大グリッドはY軸が北から南に向かって1、2、3、4…22、X軸が西から東に向かってA、B、C、D、…Y、Zという順序で呼称している。すなわち北西隅の大グリッドは1Aグリッド、逆に南東隅の大グリッドは22Yグリッドになる。ただし、「I」と「J」及び「O」と「Q」はそれぞれ文字が似通っているので、混同する恐れがあり、「I」及び「O」を削除して、その分詰めて設定している。そして、それらの大グリッド中の小グリッドは北西隅小グリッドを始点にして、Y軸が北から南に向かって00、10、20、…、90、X軸が西から南に向かって00、01、02、03、…09という順序で呼称する。つまり北西隅の小グリッドから南東へと対角線上で見ると00、11、22、…99というように進んでいくことになる。すべてのグリッドは、北西隅に打たれた杭の呼称で呼ばれている。

調査は幅約2mのトレンチを設定し（第3図）、バックホウを用いて表土除去を実施した。トレンチの番号は東から1T、2T、3T…とした。遺構が検出された箇所については拡張を行い、その時期や性格を確認した。

2 遺跡の位置と環境（図1）

白井谷奥遺跡（1）は、北総開発鉄道「千葉ニュータウン中央駅」の真南約1kmに位置し、印旛沼の西端に注ぐ神崎川の支流、戸神川右岸の標高25mの台地上に位置する。この台地は東西300m、南北600mを



- 1. 白井谷奥遺跡
- 2. 鳴神山遺跡
- 3. 船尾白幡遺跡・船尾白幡II遺跡
- 4. 北の台遺跡
- 5. 清戸遺跡
- 6. 大塚前遺跡
- 7. 南西ヶ作遺跡

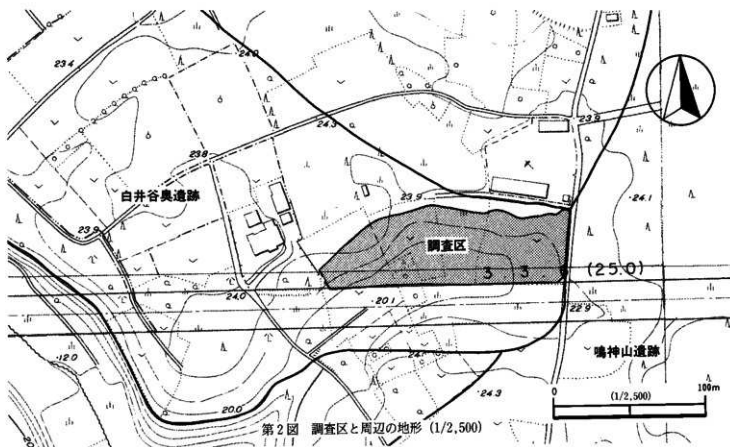
第1図 周辺の主な奈良・平安時代の遺跡

測り、東側に幾つかの小支谷が入り込むが、台地のほぼ全域で、奈良・平安時代の集落が展開していることが想定される。

付近は現千葉県企業庁や現住宅・都市整備公団により、昭和40年代中ごろから千葉ニュータウンとして大規模な宅地開発や関連する市街化整備が行われており、周辺の遺跡については比較的早くから発掘調査が実施されている。当遺跡近くでも発掘調査が進み、幾つかの奈良・平安時代の集落が存在していることがわかってきた。隣接する鳴神山遺跡（2）では昭和63年度から発掘調査が開始され、竪穴住居跡や掘立柱建物跡を多数検出したほか、墨書土器、刻書土器、ヘラ書土器などが多量に出土している。⁽¹⁾ 昭和49年から調査が行われた船尾白幡遺跡・船尾白幡II遺跡（3）でも竪穴住居跡、掘立柱建物跡を検出したほか、墨書土器や青銅製帯金具、石帯、鉄製の鎧などが出土している。⁽²⁾ 北の台遺跡（4）や清戸遺跡（5）では、墨書土器、須臾器が出土し、⁽³⁾ 南西ヶ作遺跡（7）では丸瓦や平瓦、蓮の花弁の絵を描いた墨書土器が出土している。⁽⁴⁾ 大塚前遺跡（6）では四面庇建物、竪穴住居を検出したほか、宝相華文軒丸瓦や軒平瓦、「殖」と記された文字瓦などが出土している。⁽⁵⁾

注

- 1 郷邨英司 1994 「鳴神山遺跡群出土の文字資料」『研究連絡誌』第40号
- 2 鈞千葉県文化財センター 1976 「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書」V
鈞千葉県文化財センター 1994・1995・1996 「千葉県文化財センター年報」
田形孝一 1997 「下総国印旛郡松徳郷の歴史景観—印西市鳴神山遺跡とその周辺—」『千葉史学』第31号
- 3 鈞千葉県都市公社 1974 「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書」III
鈞千葉県文化財センター 1987・1992 「千葉県文化財センター年報」
- 4 鈞千葉県文化財センター 1992・1993・1994 「千葉県文化財センター年報」
田形孝一 1997 「下総国印旛郡松徳郷の歴史景観—印西市鳴神山遺跡とその周辺—」『千葉史学』第31号
- 5 鈞千葉県都市公社 1973 「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書」II



II 検出した遺構と遺物

1 調査成果の概要 (第3図・第4図・第5図)

検出され遺構は、陥穴3基、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡7棟、土坑6基、溝6条、ピット26基である。このうち1号溝については、確認調査の段階で調査を終了し、他の遺構については確認調査のみ行った。遺物は奈良・平安時代の須恵器、土師器が中心であるが、縄文土器、奈良、平安時代の鉄製品片、中世の陶器片も出土している。しかしすべて小破片である。

8 Tを断面観察したところ、確認面での標高21.4mより低い部分は埋没谷であることがわかった。土層は、1が現表土で暗褐色土層、2が黒色土層、3が暗褐色土層、4が黄褐色土層でソフトローム層である。2、3は埋没谷の埋土と考える。

2 遺構と遺物

本遺跡からは前節で述べたように多彩な遺構が検出されているが、本節においては遺物の出土した遺構を中心に、代表的な事例についてのみ記載する。

1号陥穴 (第6図)

縄文時代の陥穴は調査区の東側で3基検出されたが、1号陥穴について南側を半載して調査を行った。

平面形は楕円形で、短軸は0.6m、深さは0.92m、長軸は推定で2.2mを測る。長軸の方位はN-3°-Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は自然堆積で、1は暗褐色土層、2は暗黄褐色土層、3は黄褐色土層である。半載した覆土中からは遺物は出土していない。

1号竪穴住居跡 (第7図)

主軸とそれに直交する線に沿ってサブトレンチを入れて調査を行った。

確認面は北から南へと下がる緩斜面であり、北辺と南辺の高低差はおおよそ0.4mである。主軸は推定であるが、N-11°-Eである。

覆土は自然堆積で、1はローム粒を多く含む暗褐色土層、2も暗褐色土層であるが焼土粒を多く含んでいる。3は暗黄褐色土層で壁の崩壊に伴うものと思われる。4は山砂を多く含む暗黒褐色土層、5は山砂主体の層で、共にカマドから流れたものと思われる。主軸に直交したサブトレンチの西辺には山砂が多量に見られることから、住居の西側に作ってあったカマドを、北側へと作りかえた可能性も考えられる。

サブトレンチ内から出土した遺物はすべて破片であるが、図示できたものは、須恵器6点と土師器14点の20点である。1は土師器の杯で、推定口径14.6cm、色調は淡褐色で内面には線刻が見られる。9は土師器の蓋で推定口径12.8cm、内面・外面とも橙色である。10、11は土師器の小型甕で、10は推定口径10.6cm、内面は暗褐色でヘラナデ、外面は暗赤褐色で縦方向ヘラケズリ、11は推定口径10.2cm、内面は暗黒褐色で、ヘラナデの後、頸部にヘラケズリ、外面は赤褐色、ヘラケズリで調整される。10、11共に焼成は良好であ

る。12は土師器の常総型甕で、推定口径24.0cm、内面、外面とも褐色である。17は土師器の小型甕で、外面に墨書が見られる。胴部外面の墨書は「()万呂」、底面の墨書は「方代」と読める。底径は6.0cmで、雲母粒や砂粒を多量に含んでいる。内面は暗褐色でヘラナデ、外面は明褐色でヘラケズリである。18、19は土師器の小型甕で、18は推定底径7.0cm、色調は赤褐色で、内面はヘラナデ、外面はヘラケズリであるが、体部はヘラケズリの後にナデを施している。19は内面が赤褐色でヘラナデ、外面は暗褐色でヘラケズリである。20は土師器の甕で、2次焼成を受けているため外面の剝離が著しく調整は不明である。内面は黒色でヘラナデである。

2・4・5は須恵器の杯、3・7・16はそれぞれ須恵器の盤、蓋、壺である。6は土師器の杯であるが、体外に墨書が見られる。8は土師器の蓋、13、14、15は土師器の甕である。

須恵器は新治産のものが主体であり、土師器は非クロコ土師器が主体である。少数見られるクロコ土師器の中には、赤色塗彩のものも含まれている。

1号掘立柱建物跡（第6図）

柱穴をそれぞれ半截して調査を行った。

平面形は桁行4間×梁行3間の長方形を呈している。桁行長は5.4m、梁行長は4.0mで、柱間寸法は桁行が約1.7m、梁行が約2.1mである。長軸方向はN-9°-Eの南北棟である。掘り方は円形で、直径約40cm～60cm、柱痕はP1、P2、P3の断面観察で確認でき、直径は約20cm、深さは約35cmを測る。

覆土の色調は次のとおりである。

P1 1：ローム粒を少量含む褐色土層 2：柱痕で暗褐色土層 3：ローム粒を多く含む褐色土層
P2 4：ローム粒を少量含む褐色土層 5：柱痕で暗褐色土層 6：ローム粒を多く含む褐色土層
P3 7：柱痕で暗黒褐色土層 8：褐色土層 9：暗褐色土層

半截した覆土中からは遺物は出土していない。

1号溝（第6図）

確認面は西から東へと下る緩斜面であり、高低差はおおよそ1.2mである。ほぼ東西に走るが、やや北にずれている。東側は途中から埋没谷へ入り、東辺は確認できない。幅は40cm～80cm、深さは確認面から4cm～23cmを測る。

覆土は自然堆積で、1は暗褐色土層でローム粒をやや多く含み、2は暗褐色土層だがローム粒は少ない。

出土した遺物はすべて小破片である。図示しないが、縄文土器や土師器の小片に混じって近世の灯明皿の小片が出土している。

2号溝（第6図）

サブトレンチを入れて調査を行った。確認面は標高21.0m～21.3mの埋没谷の中であり、北から南へ下る斜面である。溝はほぼ南北に走るがやや東に傾く。北側は3号溝と合流し、南側は確認できた南端よりさらに延びるものと思われる。幅は推定で0.5m～1.1m、深さは断面観察部分で18cm～33cmである。

覆土は、1が暗褐色土層で2が褐色土層、3が暗黄褐色土層で共に粘性が強い。

サブトレンチ内の覆土中からは遺物は出土していない。

3号溝（第6図）

サブトレンチを入れて調査を行った結果、溝はさらに2条に分かれる可能性がある。特に硬化面は認められなかったが、複数の溝が合流しており、道路として機能していた可能性もある。

覆土は1が暗褐色土層で、ローム粒を少量含んでいる。2も暗褐色土層だがローム粒を多量に含み、共に粘性は強い。

サブトレンチ内の覆土中からは遺物は出土していない。

その他の遺物（第8図）

陶器の甕（21）の破片が2 Tから、須恵器の杯の破片が7 Tから出土している。

21は常滑の甕で、17P-29区、標高22.55mから出土した。自然釉が付着し、側面が摩滅しており、砥石として転用されている。22は16N-54区の竪穴住居跡の確認面から出土している。新治産で1号竪穴住居跡で出土している須恵器と同時期のものと思われる。推定で口径は13.8cm、底径は7.6cmである。色調は内面、外面が灰褐色、断面は黒色で、焼成は酸化焰である。調整は内面がヨコナデ、外面は体部がヨコナデで底部は回転ヘラ切りの後ヘラケズリを施している。

III まとめ

冒頭でも述べたように、本遺跡を含む台地には、奈良・平安時代の集落跡が展開していることが想定されたが、調査の結果、白井谷奥遺跡でも奈良・平安時代の集落が広がっていたことが確認された。

確認調査のため年代の特定には不確定な部分が多いが、1号竪穴住居跡は、出土した遺物が非クロロ土師器が主体で、赤色塗彩のものや、土師器の甕が含まれることを考え、クロロ土師器が出現して間もない8世紀中ごろのものではないかと推察される。

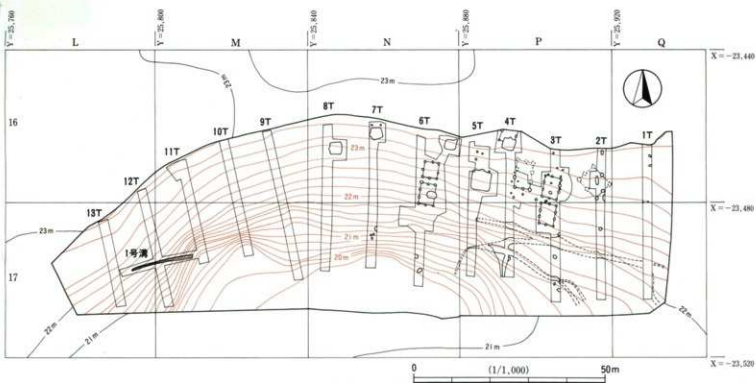
1号掘立柱建物跡についても、今回の調査では遺物の出土はなかったが、掘込みの形状などから竪穴住居跡と余り時期差がないと考えられる。

調査区内で確認された奈良・平安時代の集落跡は、確認面での標高22mより高いところに位置し、埋没谷に沿って展開されていた様子がうかがわれる。埋没谷がいつ形成されたかについてははっきりしないが、トレンチ断面からは全く遺物が出土していないことから、集落が形成される以前に埋まったものと思われる。調査区内では、公共座標Y=25,840より西には集落跡が認められないが、さらに標高の高いところでは西へと広がる可能性も否定できない。

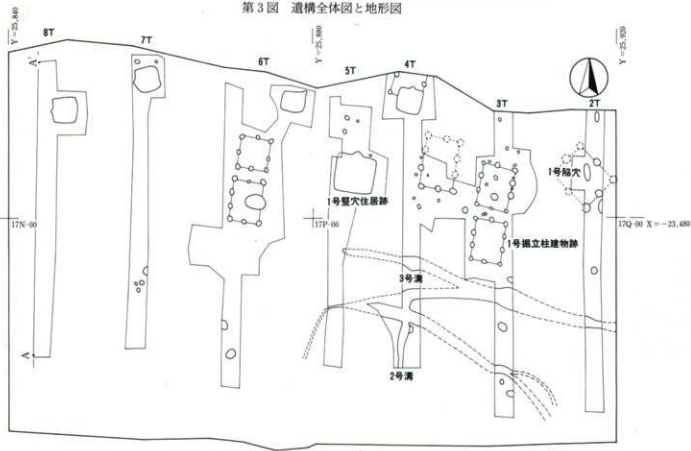
1号溝は出土遺物から近世のものであると考えられるが、2号溝、3号溝については遺物の出土もなく、確認調査の段階では時代の特定は難しい。しかし、覆土の様子や近くで常滑の甕の破片が出土していること、標高の近いところからは6 Tで地下式坑が検出されていることなどを考えると、中世のものである可能性がある。複数条の溝が合流しているが、どのような機能をもっていたかは定かでない。

調査区東側からは縄文時代の陥穴も複数検出され、縄文時代の狩猟の場としての性格ももっていたようである。なお、下層の確認調査は実施していないので、旧石器時代については不明である。

以上のことから、本遺跡は、縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺跡であり、特に奈良・平安時代の集落跡としての性格が強いことが明らかになった。



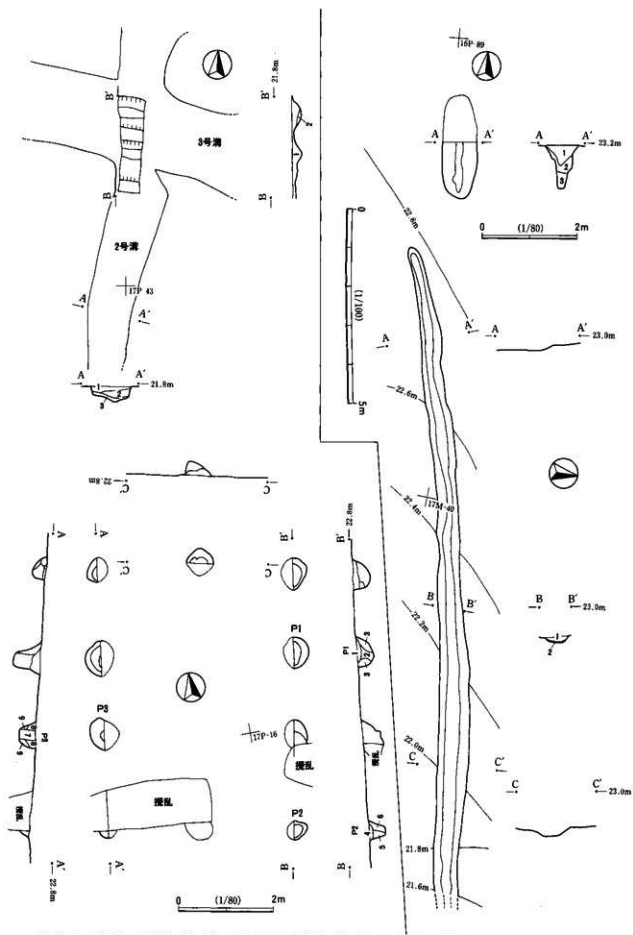
第3図 遺構全体図と地形図



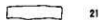
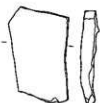
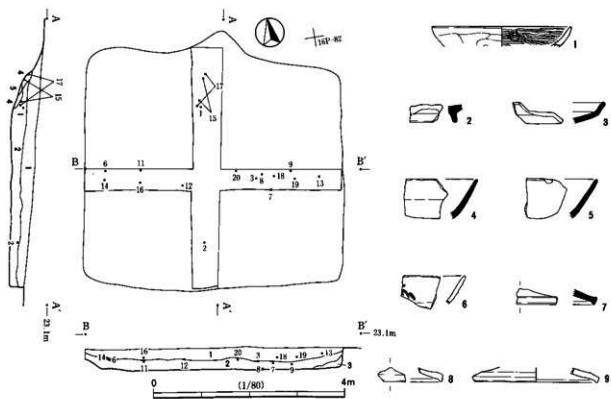
第4図 2T~8T遺構配置図



第5図 8T断面図



第6圖 2号溝・3号溝(左上)、1号獨立柱建物跡(左下)、1号陥穴(右上)、1号溝(右下)



0 (1/2) 5cm

0 (1/4) 10cm

0 (1/4) 10cm

第7図 1号竪穴住居跡と出土遺物

第8図 2T・7T出土遺物



遺跡周辺航空写真（京葉測量株式会社 平成10年撮影）（S=1/12,500）

- | | |
|--------------------|----------|
| 1. 白井谷奥遺跡 | 2. 鳴神山遺跡 |
| 3. 船尾白幡遺跡・船尾白幡II遺跡 | 4. 北の台遺跡 |



調査前近景 (南東→)



調査の様子 (南東→)



2 T 全景 (南東→)



3 T 全景 (南東→)



4 T 全景 (南→)



5 T 全景 (南→)



7 T 埋没谷 (北西→)



5 T 埋没谷 (北西→)



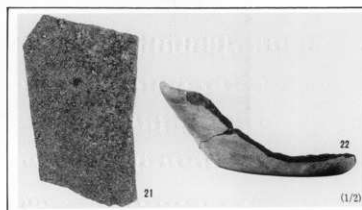
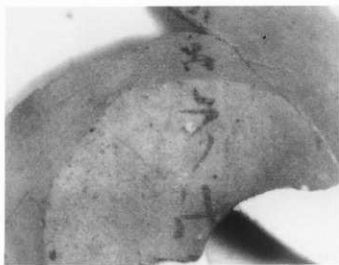
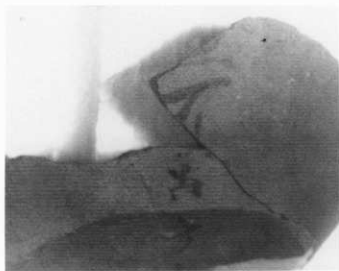
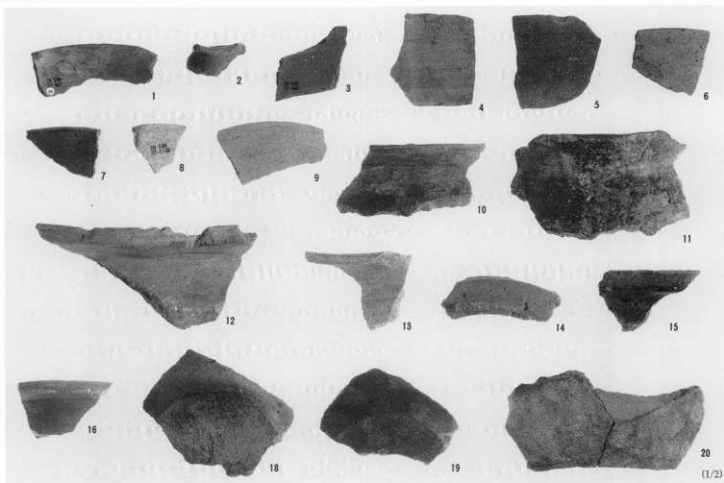
1号沟



1号掘立柱建物跡



1号竖穴住居跡



報告書抄録

| | | | | | | | | |
|-----------------|--|---------|----------------------|------------------------------|--------------------|-----------------------------------|---------------------|----------------------------|
| ふりがな | ちほほくぶちくしんしがいらせうせいせいびじぎょうかんれんまいせうぶんかざいちようきほうこくしよ | | | | | | | |
| 書名 | 千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ | | | | | | | |
| 副書名 | 印西市白井谷奥遺跡 | | | | | | | |
| 巻次 | Ⅲ | | | | | | | |
| シリーズ名 | 千葉県文化財センター調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第369集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 石田清彦 | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 千葉県文化財センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL.043-422-8811 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦1999年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 所収遺跡 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | | | | m ² | |
| しほいかにおく 白井谷奥 | ちほほくぶちくしんしが 千葉県印西市 とがぬきたのうち 戸神北ノ内 1043 | 12231 | CN508 | 35度 47分 25秒 | 140度 07分 17秒 | 19990201 } 19990208 | 7,000m ² | 千葉北部地区新市街地造成整備事業に伴う埋蔵文化財調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 白井谷奥 | 包蔵地 | 縄文時代 | 陥穴 | 3基 縄文土器 | | 確認調査のみで終了し、遺構面を盛土で保護した農地として利用される。 | | |
| | 集落跡 | 奈良・平安時代 | 竪穴住居跡 掘立建物跡 土坑 | 5軒 7棟 4基 須恵器 土師器 | | | | |
| | 墓域 | 中世 | 土坑 溝 | 2基 5条 陶器 | | | | |
| | | 近世 | 溝 | 1条 | | | | |

千葉県文化財センター調査報告第369集
 千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ
 一印西市白井谷奥遺跡一

平成11年3月31日

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千 葉 県 企 業 庁
 千葉市中央区長洲1-9-1

財団法人 千葉県文化財センター
 四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 正 文 社
 千葉市中央区都町2-5-5